



New Year Dance 2004

恒例の新春ダンス会 New Year Dance 2004 をひらきます。会場予約の関係で、2004 年はロバート・バーンズの誕生日、立春に近いころになりました。大勢の会員のご出席をお待ちしております。

2004 年 1 月 25 日(日) 午後 1.00-4.30
 東京・赤羽会館 (JR 赤羽駅東口)
 ¥1,000 (RSCDS 非会員 ¥1,200)
 ミュージシャン 本守明美・村上美枝子

Australian Ladies	Campbell
Kingussie Flower	21-6
The Earl of Home	12-11
The Machine without Horses	12-12
Anderson's Rant	Misc-1
Sugar Candie	26-9
The Happy Meeting	29-9
The Irish Rover	Cosh
Tulloch Gorm	8-1
EH3 7AF	40-6
Old Nick's Lumber Room	26-6
Miss Milligan's Strathspey	Lflt-19
The Eightsome Reel	2-12
Duke of Perth	1-8
The Ennismore Strathspey	Dix
A Trip to the Drakensburg	38-8
Odd Thoughts	Misc-2
Ex. Hooper's Jig	Misc-2
(難曲にウォークスルーあり)	

2004年東京支部合宿

2004 年 2 月 14 日(土) - 15 日(日)
 石川島研修センター (神奈川県綾瀬市)
 ティーチャー: マルカム・ブラウン
 & ピーター・クラーク
 ピアニスト: パット・クラーク
 & 東京支部ミュージシャン
 ¥15,000 (RSCDS 非会員 ¥17,000)
 定員 80 名

リカップだけで General Stuart's Reel が踊れる人が参加できます。

くわしくは次号ブランチレターで■

東京支部20周年行事

<パリ・ブランチ・ウィークエンド・ツアー>

2004 年 4 月 10 日(土) - 12 日(月)
 パレ・ボーモン 定員 160 名
 (フランス南西、ピレネー・アトランティック県の Pau ポー市)
 ティーチャー: アン・ディックス
 ピアニスト: ジェニファー・ウィルソン
 ボールのミュージシャン: キース・スミス & グリーン・ジンジャー

上記を前号でご紹介したところ、多くのお問い合わせをいただき、東京ブランチ 20 周年行事の一つとしてグループ・ツアーを行なうことになりました。

2004 年 4 月 7 日(水) - 15 日(木) 9日間
¥275,000

2 人 1 部屋利用。ウィークエンド参加費を含む
 1 人部屋追加料金 ¥49,000
 最少催行人数 10 人。定員 20 人
 (先着順。東京ブランチ会員が参加可)
締切り: 定員に達したとき、または 11 月末日。

自由行動日を除いて全食事つき。
 ホテル、レストランは中級を利用。
 観光は日本語ガイド。
 添乗員は同行しませんが、チェアマン トム鳥山がツアーを代表します。
 旅行手配代理店: (株) JTB 町田支店

4 月 7 日(水) 成田発パリ経由リヨンへ。
 4 月 8 日(木) リヨン半日観光。夜リヨンのグループとダンス。
 4 月 9 日(金) アビニオン観光。ツールーズへ。
 4 月 10 日(土) 聖地ルルド観光。ウィークエンドへ。
 4 月 11 日(日) パリ・ブランチ・ウィークエンド。
 4 月 12 日(月) 午後航空機でパリへ。
 4 月 13 日(火) 終日自由行動。各種オプション・ツアーを用意。
 4 月 14 日(水) 午前パリ発。
 4 月 15 日(木) 朝成田着。
 お問い合わせは
 トム鳥山 Tel/Fax 044-988-7773 へ。
 (団体でなく、個人で参加希望されるかたには同ブランチの案内書をお送りします)

東京支部20周年行事(つづき)

<東京ランチ・ウィークエンド>

2004年10月30日(土) - 31日(日)
石川島研修センター
ティーチャー: アン・ディックス
& レイチェル・ウィルトン
ミュージシャン: 交渉中

<20th Anniversary Ball>

2004年11月3日(水・祝) 午後
場所確保中
ミュージシャン: 交渉中■

東京ランチ・クラス

ビギナーズ・クラス

11月10日(月)・24日(月) 1.30-4.30
12月8日(月)・22日(月) 1.30-4.30
千代田区総合体育館 5F・多目的室 ¥800
講師 小山かおる・境雅子

11月から半年間、あらたなクラスの始まりです。
お知り合いのかたをお誘いください。
担当 松田正子 0438-23-0475

ステップ・ダンス・クラス

11月8日(土) 1.15-2.05
12月13日(土) 1.15-2.05
講師 櫻井香枝
いずれも幡ヶ谷社会教育館 ¥800
担当 池間悦子 045-982-8528

インターミディエイト・クラス

11月8日(土) 2.15-4.30
講師 吉江紀美・増田静子
12月13日(土) 2.15-4.30
講師 中島淑子・篠塚昌子
いずれも幡ヶ谷社会教育館 ¥800
担当 池間悦子 045-982-8528

アドバンスド・クラス

12月6日(土) 6.20-8.45
講師 小山かおる
1月は会場休館のため休み
2月7日(土) 6.20-8.45
講師 小幡正明
いずれも会場は別途お知らせします
担当 鈴木百代 049-296-1766■

みなさんのクラスに マルカム、ピーターを

東京ランチ合宿終了後、マルカム・ブラウン、パット&ピーター・クラークは埼玉ランチ主催の週末合宿に移りますが、3日間ほど自由時間があります。
自由時間: 2月16日(月) - 2月18日(水)

この機会にマルカムまたはピーター、あるいは両者のティーチングでクラスを開きたいというグループがあれば(国内交通費、経費などをご負担いただくこととなりますが)、セクレタリまでお早めにご希望をお寄せください■

RSCDS サマースクール 2004

第1週 7月18日(日) - 25日(日)
第2週 7月25日(日) - 8月1日(日)
第3週 8月1日(日) - 8日(日)
第4週 8月8日(日) - 15日(日)

申込用紙は本部から1月初旬に入手見込みです。
用紙が必要な場合は、1月以降にセクレタリ若松陽子までお問い合わせください■

次期チェアマン、 スチュワート・アダム来日



2001-2002年にかけて当支部のECM代表をつとめたスチュワート・アダムがクリス夫人をともなって来日しました。10月中旬に行なわれた東京ハイランド・ゲームズのカントリー・ダンス競技会でアジュディケーター(審判員)に招待されたためです。

ECMの発展的解消により、当支部とのつながりも解消しましたが、スチュワート・アダムは次期ソサエティ・チェアマン(正しくはチェアマン候補)に当選しており、2005年からRSCDSを背負って立つ人です。ごく短時間でしたが、当支部チェアマンがスチュワートに表敬することができました。スチュワートは当支部の要請であれば、ソサエティAGMにおける代議員を今後もよろこんでつとめたいとのことでした■

どうなる、クラス案内のはがき？

(Tom Toriyama)

会場確保の成否判明がクラス予定日の直近であるため、ランチでは関東圏の会員および送付希望の会員、約230名のかたに毎月クラスの案内をお送りしています。

ここ3年ほどを見ますと、各クラスの参加者数は2ないし5セット、しかも顔ぶれはだいたい同じという状況です。印刷費を含め毎月14,000円の費用、そして発送の手間をかけて案内をお送りしているわりにはそれほどの成果がえられておりません。1995年のランチ・クラス開始以来、一度も参加したことがない会員にも、関東圏在住という理由ではがきを送っている状況にあります。

ランチ委員会では費用対効果の面、ならびに関東圏外の会員のお金をむだづかいしているという不公平性から、一律の案内発送がよいのか、話し合っています。

例として、

- *案内発送をやめ、次月の予定連絡は当月のクラスで行なう
- *あるいは、クラスに年2回以上出席した会員に案内を送る
- *案内送付を希望する会員から、はがき現物を事前に1年分いただく
- *送付を希望する会員からは、年会費に加え、はがき代をいただく

この件については、みなさんから多くのご意見をいただき、2004年度からの方向をきめて行きたいと考えます。セクレタリ若松陽子までご意見をお寄せください■

RSCDS 東京支部

チェアマン 鳥山豊喜 (トム鳥山)

T/F 044-988-7773

Email: Tomtori@aol.com

セクレタリ 若松陽子 T/F 042-593-2446

〒191-0022 日野市新井 405-3

Email: ywakamat@mail.hinocatv.ne.jp

トレジャラ 境 雅子 T/F 047-368-3873

委員会メンバー 池間悦子 045-982-8528

佐藤裕治 0424-86-3929

鈴木百代 049-296-1766

松田正子 0438-23-0475

藤田淑子 044-954-7235

ホームページ www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/

同担当 吉澤敦子 T/F 0298-41-0767

Street か Streets か？

(Tom Toriyama)

ことしのサマースクールでジョー・マーフィが「きみの“Dancing in the Street”だけれど、あれは“Dancing in the Streets”が正しいんじゃないか？」なるほど、この行事の場所は1ヶ所だけでなく2ヶ所で行なわれる。

日本人には単数・複数の概念が希薄である。リール・オブ・スリーも、あちらでは両サイドで踊る場合にはリールズ・オブ・スリーである(両サイドも両サイズが正しい)。可算語・不可算語の区別もよくわかっていない(この区別は絶対的なものでないそうだ)。ダンスを本部に提出するとき、単数・複数を気にもしないで“Street”で送ったのである。

この件をロンドン支部の機関紙に投書したところ、同紙編集長ダニエル・カプロンの返信は「英語国民にとっちゃあ“Street”でも“Streets”でも、どっちでもいいんだ。でもきみがそういうんなら“Streets”にするよ。クリスマスのダンス会でこのダンス、みんな楽しく踊ると思うよ」■

ニューズレター発行の指針

(RSCDS 会員サービス委員会、2003.9.22)

多くのランチでは定常的にニューズレターを発行し、会員とのコミュニケーションをはかっている。その内容は多種多様であり、こうあるべきという基準はない。ニュースを発行していないランチもあるが、たとえA4判1枚でもよいから、発行を考えてほしい。以下は、本部に寄せられた各ランチ出版物の内容例である。

- *ランチ・チェアマンのメッセージ(その支部への好意的な文言を)
- *ランチ運営委員の名簿
- *今後のスケジュール(クラスやダンス会)
- *ランチ活動の報告(クラスやダンス会の報告)
- *会員に関するニュース(追悼を含む)
- *本部に関するニュース(理事会、専門委員会からの情報)
- *会員からの記事(例:紀行、趣味、ダンスの由来などの記事)

会員とのつながりを深めよう、という考えに立てば、上の例ではまだまだ不足である。

これからニューズレターを発行しようと考えているランチは、本部から世界各地のニューズレターのコピーを入手できる。そこにはすばらしいアイデアがたくさん含まれているので、問い合わせてほしい■

A Castle in the Air

(ミニ・ベニング、2003.9.4)

(エディター注) Book 43 ダンスの“A Castle in the Air”について、作者のミニ・ベニング Minnie Bänninger (在スイス) からクラスメートの中田多鶴子さんにとどいたコメントです。

わたしのダンスを楽しんでくれたとのこと、ほんとうにうれしく思いました。Bars 16 で 2nd man は long way round して 2nd place に入るのではなく、straight in してください。サマースクール前半のコースでは long way round するよう指導されたとのことですが、わたしが参加した第3週で、straight in するようお願いしました。日本の3プランチにもあなたからいってくれない？ RSCDS にはわたしからいうつもり。

昨年、ロジ [Rosi Betche, Swiss Lassie と Hall Change の作者] といっしょにバイエルンにいき、ノイシュヴァンシュタイン NEUSCHWANSTEIN 城を見学しました。山のうえに建っている城で、まるで空中にあるような城です。秋はいつも霧に つつまれています。入るまで長いこと待たされ、ロジは読書、わたしは新ダンスの考案でときを過ごしました。ダンスを書き上げたとき、ロジが「名前はなんにするの？」わたしはちょっと考えて、空に浮かんでいるような城を見上げ、「Caste in the Air” よ」バイエルン王ルドヴィッヒ 2 世が建てた、おとぎ話に出てくるような美しい城です。

このダンス、わたしはその気がなくて、ロジが勝手に RSCDS に送ったんです■

Book 43 Dances 講習会

東京北会場

9月7日(日)赤羽台東小学校に62名が参加し、田村妙子、大井富佐子、松橋順子の各講師により10ダンスを楽しみました。RSCDS 非会員が3割ほど参加されていましたが、それほどの混乱もなく平均以上のレベルでした。

みなさんがとまどったのは“Bea’s Delight”と“The Argyll Square”。“Bea’s Delight”の1回目はスムーズ、2回目の bars 25-32 で 2nd & 3rd couple がリール・オブ・スリーと勘違いして飛び出す、“The Argyll Square”では bars 73-80 の circumference のリール・オブ・フォーがうまくうごけない、というセットが見受けられました。いずれも講師のていねいな指導で最後にはきちんと踊ることができました。

すべての音楽を弾いていただいた市川洋子さん、ありがとうございます。

学校行事の谷間を考えるとこの日に行ないまし



た。昨年と同じくきびしい暑さで、少し涼しくなってからやったほうがよいのではないか、というのが委員会の反省事項です。

東京南会場

9月23日(火・祝)川崎市多摩市民館で行ないました。参加するのは神奈川県や東京南部の会員、50人も来れば上々と予想していたところ、飯能・狭山・群馬・君津・大分・金沢などどんでもないところ(失礼!)からの会員が出席され、9セットで会場は満杯状態でした。

講師は若松陽子、トム鳥山の2人、こちらの音楽は代替CDでした。“Strathmore”ではCDがゆっくりすぎ、踊りをもてあましていたセットがあったほどです。ここでも“The Argyll Square”の circumference リール・オブ・フォーに手間どりました。“Wind on Loch Fyne”のイメージが刷り込まれ、何回やっても円周上を4 bars 直進するダンサーがおりましたよ。



余談ながら、Book 43 表紙の写真は昨年6月1日にホリールード宮殿庭園で生放送されたラジオ“Take the Floor”の場面とのこと(スチュワート・アダムの話)■

おわび (Tom Toriyama)

1. 前号のランチレターNo.60の2ページで見出し2カ所が“2004”年となっていました。“2003”年が正です。おわびいたします。

2. ランチ年会報の発行が遅れており、申しわけありません。できるだけ早く発行したいと、鋭意編集中です。いましばらくご猶予を。

わたしのダンス考案作法

(ジョン・ドルーリ)

(エディター注) この記事は 1993 年のロンドン支部機関紙にのったものである。以後 10 年、ダンス創作数は 700 を越え、ジョン・ドルーリも 80 歳を迎えたが、記事は新鮮さを失っていない。ダンス創作の内幕を知る絶好の内容である。

すべてのはじまりはフローラだった。フローラはウェスト・カンバラッド・ダンシング・クラスの会員で、よく伸びるしなやかな脚をもった人だった。フローラというのは、ほんとうは別の人の名前で、『わたしじゃないってば!』と大きな声でよく文句をつけていた。イアン(クラブの会員で、フローラと名づけた人)は、『かの女はね、心の中ではそう呼ばれるのを楽しんでいるんだ。ガートルード女王につながるからね。文句が多いのは楽しんでいる証拠さ』

われわれはよく伸びる脚をたたえて、フローラのためにダンスを作ろうと考えた。何人かがいると考えたが、わたしのダンスがよいということになった。ティーチャーのリズが、そのダンスをみんなに教えた。はじめダンスの名前はなかったが、踊り終わってから『このダンスの名前は“Flora’s Rant”です』と告げられた。その様子をいまでも思い出すことができる。

地理の試験は百点満点

このダンスは時とともにやがて消えていってしまい、わたしもどんな踊りだったか忘れてしまったが、これが原点となって種がまかれ、伸びていったのである。ダンスが生まれはじめたのだ。わたし自身よく説明できないのだが、心に新しいダンス・ムーブメントがわきあがってくるのである。これは学生時代、地理ではたいがい百点満点をとっていたことに関係しているのかもしれない。

歳月に耐える最初のダンスは、24 小節のストラスペイ “A Trip to Tobermory” である。わたしはこれをリーフレット形式で印刷し、セント・アンドルーズに参加するリズに持って行ってもらった。(わたしはいまにいたるまで、サマースクールに正式参加したことがない)。リズはその 1 枚をミス・ミリガンに進呈した。1 年後だったか、それよりあとだったか、このダンスはヤンガー・ホール・プログラムののり、わたしは『やった!』と思った。

そうこうするうちに、わたしはカーライル & ボーダー支部の会員になり、面白そうなダンスを作ると支部の連中がそれを試す機会をつくってくれた。みんなはたいへん熱心で、ベスト・ダンスを集めて本にしよう、とわたしをけしかけた。こうして生まれたのが “Bon Accord Book” である。

最初にできあがったものは謄写印刷で(活版ではなかった)、わたしは 100 冊の青い表紙に白バラとヘザーを書き、色を塗った。

真夜中にアイデアがまとまるときがある

ダンスのアイデアは、思いがけないときにひらめくことがある。たとえば “The Bonnie Lass of Bon Accord” は、ジミー・ブレア楽団のレコードをきいているとき、約 10 分で作った。(この演奏は始まりのコードがなく、8 小節のイントロ部分をそれにあてた)。“Bratach Bana” はストロンシアン・ロッホ・スナート Loch Sunart 湖畔でキャンプしているとき、ラジオから流れてくるメロディをきいてインスピレーションがわいた踊りである。そのときわたしは、やわらかな砂の上をただひとりで散歩していた。真夜中にアイデアが浮かぶこともある。眠ろうとして、ダンスを作る気持ちがないのに、急にアイデアがひらめくのである。

ダンスを作りはじめてからまもなく、わたしはヒュー・フォス Hugh Foss に会い、かれからたいへんな激励を受けた。かれは “Bon Accord Book” 音楽の版下作成に使ったら、とブランクの五線譜とレトラセットをくれたが、これはたいへん手間のかかる作業であった。一つの譜面を作るのに約 12 時間かかったと思う。

ダンス “Bon Accord” はフォスの “Fugues” のもじりである。最初の部分は 2x12 小節のフレーズであるため、ふつうの曲は使えない。グラスゴーのウィニー・カーニー Miss Winnie Carnie がこのダンスにあうよう二つの曲を作ってくれた。2 番目の音楽は “The Bonnie Lass of Bon Accord” をアレンジしたものであった。アリー・アンダーソン Miss Allie Anderson がこの踊りを気に入ってくれ、1966 年 “エジンバラ・ファンシー” のプログラムに取り入れてくれた (“A Trip to Tobermory” もいっしょに演じられた)。そのときから “エジンバラ・ファンシー” のプログラムにはわたしのダンスが 1 曲は入るようになり、たいへんありがたいと思っている。1990 年の “エジンバラ・ファンシー” では “The Rose of Gramis” がフィーチャーされた。これはエリザベス皇太后の 90 回目の誕生日を祝って作ったものである。

招かれたグループにこたえる

1965 年にわたしはアバディーンに住まいを移し、以後 “ドルーリ・コレクション” はふえてゆき、いまや 450 以上におよんでいる。ほとんどのダンスは、見知らぬところにわたしを招待してくれ、めんどろをみてくれた人、グループの依頼にこたえてつくったものである。(どんなに愛しているかを、踊りでもってかれに見せてやりたい、というような依頼はお断りしている)。カンバラッドにおけるつつましい “Flora’s Rant” にはじま

って、わたしのダンスは全 SCD 界に広まり、そうしていろいろなところに招かれ、色あせない友情を形づくっている。

いろいろな事象が、わたしをしてダンスをつくらせる動機になっている。たとえば美しい音楽を耳にすると、その音楽が「ダンスにしてほしい」と泣いているように思える。あるダンスでうまくつくられたムーブメントがあると、それをもっと楽しめるように発展の可能性をさぐる。むずかしくて上手に踊られていないダンスがあれば、もっとやさしい踊りかたがあるのではないかと考えてみる。こんにち、ダンスづくりでいちばん一般的な要因は、特定の目的のためにダンスをつくってくれ、と頼まれる場合である。

だいじなことをいっておきたい。印刷にまわす前にダンスのアイデアは完全にテストされる。わたしには実験的なアイデアをよろこんで試してくれるグループがついていて、ありがたいと思っている。グループは夕方に学校に集まってダンシングしたあと、その見返りにわたしの家で夕食となる。かれらが好きなのは踊ることなのか、それとも食べることなのか、わたしにはわからないが、ダンサーが出席を強いられることはない。

たいがい、わたしがイメージした以上の出来栄えとなるが、ときにはざん新かつ魅力あると思ったフィギュアが、実際にはそのとおりにいかないこともある。ヒュー・フォスの大部分のダンスはテストなしに本にした、とかれから聞いたが、こういうやり方をわたしはよいとは思わない。

ダンス考案者の目標は独創と単純

ダンス考案者の目標はなんだろうか？ ダンシングにおいて、愉快でダンサーを刺激するようななかを生み出すことであり、選んだ音楽によくマッチしていること、一人前のダンサーに過度の負担をかけないことが第一である。ムーブメントは音楽の小節数にぴたりと収まらなければならないが、余裕を持たせるよりも、いくらかのストレッチを行なってあるべき位置につけたほうが、わたしとしては好ましいと考えている。具体例をあげてみよう。“The Braes of Breadalbane”と“The Starry Eyed Lassie”の場合、前者はストレッチを必要とするが、後者ではリール・オブ・スリーの終りにかなりの余りが生じる。この余りはだれにとっても不要のはずである。ダンスというものは、かなりいそがしく動くことができるものである。

ダンス考案者はオリジナリティ（独創性）とシンプルシティ（単純性）を目指さなければならない。ただし、この二つを結びつけるのは至難の技である。こみいったダンスをつくるのは案外簡単である。しかし、たどりつこうとしてなかなかむずかしい目標であるけれども、シンプルで、かつ

どこかにざん新な動きをもちこんだダンスができたときは、たいへん愉快である。

音楽の選定は重要

音楽の選定は重要なことである。音楽はダンスに衝動 Impulse を与えるわけであり、究極的にどんな音楽を使うのかをまず考えなければならない。そして、ダンス・ムーブメントも音楽を生み出すもと、と考えるべきである。残念であるが、わたしが夢見るムーブメントと音楽の融合はいつもというわけではなく、理想が達成されていないのをよく感じる。この点については、他の考案者も同じである。

RSCDS 出版・研究委員会に提出されてくるダンスは指定音楽のないものが多く、指定があっても音楽とダンスがまったくつりあっていないものがある。

めったにないことであるが、ダンスの名前と曲名が同時に見つかることがあり、これはとても楽しい。ビル・アイアランドのためにダンスをつくってくれと頼まれ、偶然“The Dancing Master”という曲を見つけたときがこれにあたる。

わたしは膨大な楽譜コレクションをもっている。あてはまるのはどんな曲か、調べるに十分な程度であるが、ピアノを弾くこともできる。わたしのダンスに、特別に作曲してくれるミュージシャンもときどきいて、ほとんどはなるほどという音楽であるが、好みに合わない曲もあり、そういう場合には困ってしまう。

わたしのダンスの特長はフロー

わたしのダンスに対する批評のなかで、特長としていちばん多く寄せられるのは「フロー/流れ」である。しかし踊られているフローを見てがっくりくることがある。ダンサーたちは正しいフロア・パターンをたどり、申し分のないダンシングをやっていると疑いもしないのだが、フレーズはめっちゃくちゃ、いるべきときにいるべき場所にいないのである。ダンスはごちゃごちゃで目もあてられない、という結果になる。

きっちり踊れるダンサーと一緒に、美しいフローのダンス（わたしのダンスと限らない）を踊るときこそ至福の時間であり、ほんとうに踊ったという気分ひたれる。

新しいフォーメーションには名前を

新しいフォーメーションやプログレッションがきちんとできあがったら、それに名前をつけるのがよいと思う。そういったフォーメーションを他のダンスに流用するとき、解説文でかなり単純化が図られるからである。わたしのダンスのなかから生まれた“Inveran Reels”, “Rondel”, “Set and Rotate”は、便利な名前として引用されているのではないだろうか。

“Rondel”の名付け親はミス・ミリガン自身であ

る。ミリガンは“The Silver Tassie”がたいへんお気に入り、8 x 32 のストラスペイがアンコールされたのは、わたしの知る限りではこの踊りだけだと思ふ。セント・アンドルーズでこの踊りが紹介されてから、そういう機会は何回もあった。

もしあなたがダンスをつくり、RSCDS のブックにのせたいなら、辛抱が肝心である。出版委員会に提出されたダンスは、1回は踊ってもらえる。“いいね”と思われたダンスは「候補ダンス」にファイルされ、新しいダンスブックを出版するとき、あらためて検討対象になる。提出してから出版まで数年かかり、しかも日の目を見るのはごくわずかのダンスだけであるけれど。(“The Dance Makars (Part II)” by John Drewry, from The Reel No.204, May - Aug 1993. By the courtesy of the RSCDS London)■

サン・バレリとラウフェンを訪れる

(Tom Toriyama)

『51 師団リール』は、わたしがはじめて出会ったスコティッシュ・カントリー・ダンスである。マイケル・ヤングの記事(ブランチレター前号)を読んでサン・バレリ・アン・コーとラウフェンという町を知り、いつか訪れてみたいと思っていた。この夏、二つの町を訪れることができた。

なお、インターネット上でそれぞれの町はホームページをひらいている。諸情報を英語でえることができ、これがたいへん有用であった。

その前に、日本人ダンサーはサマースクール後にエジンバラで宿泊しなければならない。エジンバラで泊った B & B、(まったく奇遇としかいえないけれど) 埼玉ブランチ・チェアマンの佐藤雅紀氏と同宿であったが、St. Valery Guest House という名前であった。

マネジャーに「ここは第五十一師団となにか関係があるの？」とたずねた。

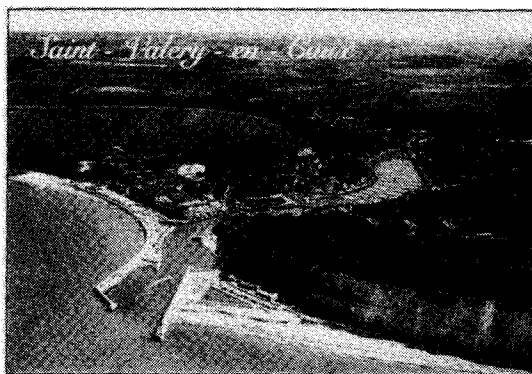
「うん、以前のオーナーが自由ポーランド軍の将校でね。かれは志願して、第五十一師団に配属され、サン・バレリから命からがら脱出してきたんだ。B & B をはじめたとき、その幸運とハイランド師団への感謝を表わして、この名前にしたそうだよ。あんた、セント・アンドルーズへいくの？ あそこのキンバーン公園とかいうところに、自由ポーランド軍のリーダーだったシコースキー將軍の銅像があるそうだ。將軍は戦争の初期に不慮の事故で亡くなったんだ。よかったらお参りしてくれ。うん、戦時中あのあたりといった海岸を守っていたのはポーランド兵だったんだよ。」

サン・バレリ・アン・コー St. Valery-en-Caux はサマースクール Week 2 のあとにいった。早朝エジンバラ発の British Airways 小型機でパリに向

かい、シャルル・ドゴール空港から地下鉄、フランス国鉄を乗り継いでノルマンディのディエップ Dieppe につく。ホテルに荷物をおき、ディエップ市内を見物する。サン・バレリに鉄道は通じておらず、フェカン Fecamp またはディエップから車もしくはバスで行くことになる。今回はディエップに宿をとった。ディエップは大きなリゾート地で、カジノ、大きなホテルが海岸べりにずらりとならんでいる。繁華街はグランド・ルー Grande Rue という名前で、600メートルにわたって店がっらなっている。

ディエップも第二次大戦にゆかりがある。1942年8月19日、カナダ兵を主体とする七千人の連合軍が上陸したが、ドイツ軍の砲火に圧倒され、五千人が捕虜ないし戦死したという。海岸にはカナダ兵の勇敢さをたたえ、失敗を悼む記念碑がある。この「ジュビリー作戦」失敗が、のちの D-Day に大きな教訓をあたえた、と本にある。

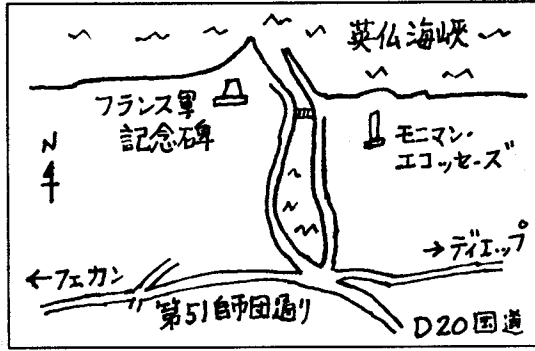
翌朝、タクシーでサン・バレリに向かう。サン・バレリ・スュル・ソンム St. Valery-sur-Somme という町もあり、スュル・ソンムのほうが大きいので(日本の地図帳はスュル・ソンムのほうをのせている)、タクシーには「サン・バレリ・アン・コー」ときちんといわないと別の方角に行ってしまう。要注意である。タクシーはセヌ・マリティーム県の平原、国道 D925 を西に突っ走る。集落と集落のあいだは直線道路で、120 km の速度を出している。ケン春日さんのいうとおり、2級国道でもフランスの道路はりっぱ。標識もきちんとしている。地理不案内でもまず迷わない。英国のように曲がり角になって不意に町名サインが現れることはない。



サン・バレリ・アン・コーの全景(絵はがき)

30分、30 km、50 ユーロでサン・バレリにつく。観光案内所はまだしまっている。とりあえず南の断崖、ファレーズ・ダブル Faraise d'Aval (直訳：上流の断崖)に登ってみる。ノルマンディ特有の白亜の断崖上にはフランス第九軍の記念碑がある。説明板には、仏語と英語で『この記念碑は、1940年6月11日-12日、ロンメル將軍指揮下のドイツ第七パンツァー師団に立ち向かった、フランス第九軍第二軽機甲師団兵士の英雄的行為をたたえるものである。戦闘の結果、サン・バ

レリ・アン・コーは1944年8月までドイツ軍が占領するところとなった』とある。



ここに立つと町と浜辺は一望のもとである。装備、補給にまさるドイツ軍にここを確保されたら、英仏軍は白旗をあげざるをえない。早期撤退を再三申し入れたにもかかわらず、フランス軍司令部の優柔不断で一個師団、八千人の将兵を失ったチャーチルの憤激、無念が思いやられる。港をこえて向こうに北の断崖、ファレーズ・ダマン Faraise d'Amont (直訳: 下流の断崖) が広がり、その先端に小さく記念碑が見える。スコットランド人記念碑のようである。坂を下り、町にもどる。

観光案内所がひらいており、町の地図をもらう。インターネット画面の地図と同じである。でもこちらのほうが大サイズ、文字も鮮明である。

地図に「第五十一ハイランド師団通り Avenue de la 51e Highland Division」というのがある。どんな通りなのだろうか。15分ほど歩いてその通りに立った。国道 D20 のことである。国道は町の一部を通過しているのだが、その部分を「第五十一師団通り」と名づけている。さて、その標識を写真におさめようと探し回るが、国道の両側は木立ばかりで家がない。ときどき降ってくる雨の中、標識を探して歩くこと 15 分、十字路に立つ青いプレートを見つけた。浮き出しの白い部分はうすれかかっているけれど、「Avenue de la 51st Highland Division」がはっきり記されている。



「第 51 ハイランド師団通り」の道路標識

この通りは繁華街ではない。しかし物流の大動脈で、その主要道路に異国の、しかも 60 年以上むかしに由来する名前がつけられている。スコットランド人に対する町の敬意が感じられた。

1940 年の戦闘で亡くなったフランス兵 218 人とスコットランド兵 206 人が眠る共同墓地が南東の町外れにあるが、時間がなかったため、行くことができなかった。

道をもどり、港の入り口にある跳ね橋を渡って北の断崖にむかう。スーパーに立ち寄り、ハム&バター付きのバゲットと水を 3 ユーロで買った。本屋に絵はがきがならんでいる。そのほとんどはこの町のものではなく、エトルタ、フェカン、ルアーブル、ノルマンディ橋、ディエップの絵柄だった。町を空から撮ったのを見つけ、十数枚買う。アパートとカジノにはさまれた通りを抜け、断崖への階段を上る。高さ 50 メートルの断崖の上は草でおおわれ、道なりに行くと記念碑が目に入る。

モニマン・エコッセズ Monument Ecosseis (スコットランド人モニュメント)。灰色のみかげ石製で高さ 5 メートルほどである。円形の基礎地面には白い石でセント・アンドルーズ十字が描かれている。



モニマン・エコッセズ

碑の上部に HD (Highland Division) のロゴ、腹部の正面に英語、反対側に仏語で碑文が彫られている。『1939-1945 年の戦争中、いのちを捧げた第五十一ハイランド師団のすべての将兵の栄光をたたえ、かれらへの感謝を忘れないために』と読める。親族をなくしたスコットランド人がおいたものだろうか、しおれていたが、花束が一つ残っていた。

道のそばのベンチで広々とした光景を見ながら、バゲットと水の昼食にする。水でなく、ワインかビールにしたかったのだが、英国の知り合いに絵はがきを書かなければならない。文面はどれも同じでよいとしても、文字はきちんとありたい (英国人の筆記体はどれもたくっているが)。ガス入りの水にした。

わたし以外にだれもおらず、思いがかなってここまでやってきた満足感と目のまえに広がる断崖と海、バゲットでいい気分である。

と、また雨が降ってきた。残念だが町に下りなければならぬ。海岸のカジノの陰で雨宿りする。砂利浜で、はだしでは歩きにくい。雨のなかで泳ぐ人が 4 人。ドイツ軍占領中は地雷が埋められ、

立入りも写真撮影も禁止されていたのだ。小降りになったので街中の広場にもどり、カフェに入る。ダブルサイズのキャフェ・ノワールをたのみ、パグットの残りを食べ、絵はがきを書く。

このサン・バレリ、大ホテルはないが、宿泊施設はそこそこにある。パリ・ブランチのウィークエンド、いつかここでやることを考えては、と同ブランチのノエル・チュービニヨンに書き送った。

予定時刻に、迎えをたのんでいたディエップのタクシーがやってきた。55ユーロでディエップにもどった。

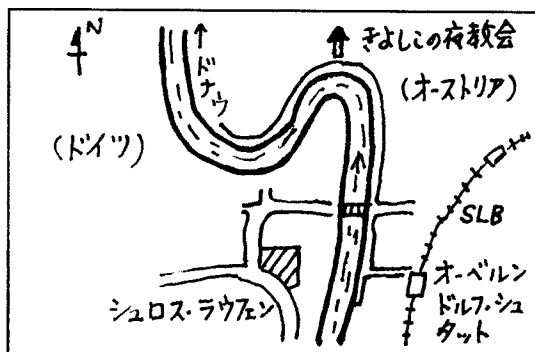
サン・バレリ・アン・コーへの行きかた

レンタカーでいちばん便利である。ドゴール空港またはパリ市内からN14国道でルーアンに向かい、ルーアンから、サン・バレリに直接行くならN15, D20 国道をたどる。ディエップならばルーアンからA151, N27 国道に行く。パリからの日帰りも可能。

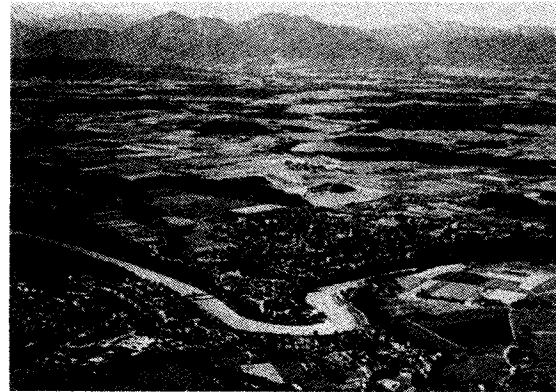
鉄道でドゴール空港からパリ市内までは国鉄近郊線またはバスとなる。ディエップ行きは、パリ、サン・ラザル駅から出る。ただしディエップ直通はなく、ルーアンで支線に乗り換え、終点がディエップである。わたしは空港ーパリ北駅ーマジヤンタ駅ーサン・ラザル駅ールーアン RD 駅ーディエップの経路で行った。空港ーサン・ラザル駅まで7.7ユーロ、サン・ラザル駅ーディエップ片道22.8ユーロ。座席予約は不要。早朝出発すれば、パリからの日帰りも可能。フランス国鉄SNCFは英国と大違いで、どの列車も時刻は正確、車両もりっぱ、乗務員も親切である。フランスは日本以上の鉄道大国かもしれない。

ディエップからサン・バレリ間のバスもあるが、1日数往復のためタクシーとなる。サン・バレリでタクシーを降りるとき、帰路もたのむ、と予約したほうがよい。

さてドイツ、バイエルンのラウフェン Laufen であるが、この町はバイエルンの東はずれにあり、オーストリアのザルツブルクから行ったほうがたいへん便利である。ザルツブルク中央駅から地方鉄道で20分、オーベルンドルフに行き、ザルツァッハ川(国境になっている)の橋をわたれば、そこがラウフェンである。



一般にはラウフェンよりもオーベルンドルフ Oberndorf bei Salzburg のほうが知名度が高い。この町の教会で1818年12月24日にクリスマス・ソングの『きよしこの夜 Stille Nacht, Heilige Nacht』がうまれたからである。



川の手前がオーベルンドルフ、対岸ラウフェン

教会の見物はあとにして、ザルツァッハ橋をわたる。下を流れる川は相当のあばれ川で、1903年にフランツ・ヨーゼフ皇帝の勅命によって鋼鉄製の橋になるまでは木製、なんども流失の記録があるという。ドイツに入ったが、EU 域内はパスポート検査も税関もない。お金はユーロで、両替の必要もない。ユーロというのは旅行者にとってじつにありがたいしくみと感じた。

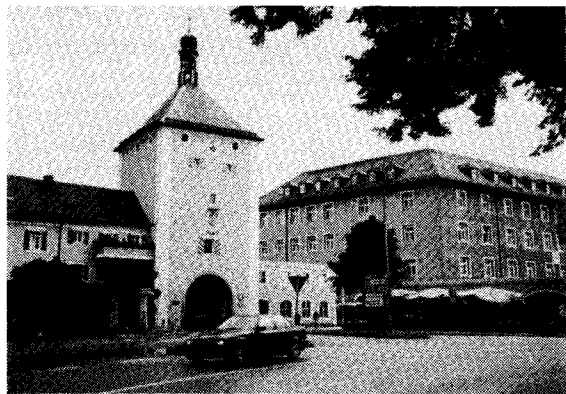
ラウフェンの旧捕虜収容所の建物がどこにあるか、見当がつかない。いまのドイツはナチ時代の記憶は思い出したくないとしているので、町の観光案内にもそのようなことは書かれていない。

広場でカフェを見つけた。トイレ借用をかねてなかに入り、コーヒー(1ユーロ)を注文する。昼前で、カフェの客は年配の人ばかりである。旧収容所本部シュロス・ラウフェンの絵はがき(前号ブランチレターp.8のもの)を取りだし、まわりの人に英語と身振り手振りで所在をたずねた。不審そうに絵はがきを見ていたが、すぐにわかったらしく、あっちだよと指さす。何分ぐらいの距離かをたずねると、わたしを表に連れ出し、あそこばかり指さす。よくわからないが、とにかくその方角に歩き出した。

町の門をくぐってすこし歩いて、その建物の気配がない。おかしいと思ってうしろを振り返ったら、絵はがきそっくりの建物が目に入った。ほんとうにすぐそこだった。

建物、シュロス・ラウフェンは60年後でも変わっていない。通りに面した部分がイタリア料理店に変わっているくらいだ。建物内部を見たかったが、いまは個人所有のアパートになっており、入り口には錠がかかっている。収容所だったころ、ほとんどの部屋が二段ベッドで埋められていたのだろうと想像する。ジミー・アトキンソン中尉はどのあたりにいたのだろうか、などと見上げな

がら、シュロス・ラウフェンのまわりをひととお
り歩いた。



旧捕虜収容所、シュロス・ラウフェン

小さな本屋でラウフェンの絵はがきを買ひ、先
ほどのカフェでこんどはケーキも注文して絵は
がきを書いた。

オーベルンドルフにもどって『きよしこの夜』
の教会にも行ったが、小さな教会だった。

ラウフェンへの行きかた

鉄道をおすすめする。はじめに述べたとおり、
地方鉄道ザルツブルガー・ローカルバーン SLB
は、ザルツブルク中央駅の地下ホームから出ている。
2両の路面電車と考えればよい。往復 8.5 ユー
ロ。車両行先表示は二つあるが、どれもオーベル
ンドルフ・シュタット停留所を通るので、気に
しないで乗る。停留所についたら、川を目ざして
住宅街を抜け、川にたどりついたら川下方向に歩
く。ザルツァッハ橋をわたればラウフェン、わた
らずに川に沿っていけば『きよしこの夜』教会で
ある。

サン・パレリもラウフェン、オーベルンドルフ
も静かな田舎町である。パリやウィーン、ザルツ
ブルクの喧騒から離れてのんびりしたいという
とき、ぜひ足を伸ばされるようおすすめする。

追記1. ビル・リトル氏から

絵はがきありがとう。妻のホープ共どもうれし
かった。ずいぶん前、アロワのディスクールのダ
ンス・コンペティションで、わたしはジミー・ア
トキンソンに会ったことがある。かれは 70 代に
なっていたが、10 人の男性ダンサーが「51 師団
リール」をデモした。かれはわたしに軍隊時代に
使っていた小さなダンス・ノートを見せてくれた。
毎日収容所の庭を行進させられ、いつか撃たれる
んじゃないかと思ったそうだ。

追記2. ビル・クレメント氏から

写真ありがとう。これはすごい物語を語ってい
るね。はるかむかし (40 年ほど前)、スターリン
グ支部選抜のダンス・チームとフランスに行き、
いろいろなフェスティバルでパイプを演奏した

ことがある。アブヴィルで踊り、サン・パレリ・
スュル・ソナムで踊った。スュル・ソナムの宿泊
はみなホームステイだった。わたしが泊めてもら
ったのはクレマンという人の家で、ご主人は公務
員だった。すてきな人たちで、同じファミリー・
ネーム [Clément]、わたしはなにかの因縁を感じ
たよ■

ダンスの誘い方、誘われ方

(ケン 春日)

フランスでは男性が女性を誘う場合、正式には
アヴォートルマン a votre main という。以前は女
性から男性を誘う習慣はなかった。女性は扇やハ
ンカチを上手に使って、あるいは扇の横からウイ
ンクしたりして目指す相手の注意をひいた。

むかし、西欧はもちろんのこと、東欧やロシア
にいたるまで社交界の言葉はフランス語であつた。
各国で催される大舞踏会は当然ながらフランス
語、フランス語を話せない外交官など存在しな
かった。現在でもスコティッシュ・ダンスをはじ
め、各国のダンスにフランス用語がかなり残って
いる。

「アヴォートルマン、マダム？」奥様お手を、とい
われたら、ダッコ d'accord (OK) ならどちらか空
いている手を出せばよい。ノン non (NO) なら首
をちょっと横に会釈すればよい。奥様お手を、と
いうのは、むかし男性が貴婦人に挨拶するとき、
手をとって甲に口づけしたなごりで、女性を敬う
儀礼である。いまでもヨーロッパの社交界ではよ
くみられる。

女性が女性を誘う場合、誘う方は男性役ができ
ることが条件。たいてい相手が見つからず、しか
たなく女性同士で踊る場合が多い。男性役をつと
める女性が本来の女性側にもどったら、ふつう以
上に上手に踊れるはずである。こちらの男性から
すると、男性役でしか踊れない女性というのはと
ても奇妙である。

英国を含めてヨーロッパの男性は気ぐらいの
高い人が多いので、自尊心を傷つけないようにし
たい。女性がエイヤツとばかりに男性を回したり、
引っ張ったりするのは禁物である。男性役の得意
な人はつい自分で踊ってしまう。ソロ・ダンスで
はないのだから、相手を立てて、ほんの少し遅れ
気味に可愛らしく。こういう人は男性に気に入ら
れて何回でも誘われる。

ではパーティで上手に踊るとはどういうこと
なんだろう？ わたしたちの浅い経験では、ヤン
ガーホールにおけるベルファストの 3 人 (リンダ、
サディ、ビビアン) に学ぶところが多かった。

わたしたちがダンスを始めたばかりのころか
ら、目やほんのちょっとした動作で次はなにをし

たらよいのか知らせてくれる。回したり、引っ張ったりしないし、リールとかプロミナードとかのことばも口にしない。相手がどんなにヘタクソでも、決して気持ちを傷つけることなくセットに溶け込ませてくれる。セットにはさまざまな技量の人々が混じっている。いち早くみなを技量を見抜き、対応してくれる。初心者の間違いやすい箇所を熟知していて、そこはとくに丁寧にガイドする。この人たちとのセットではどんな初心者が入っても、決してぐちゃぐちゃにならない。この人たちはセット全体で、それも何気なく踊っているのである。わたしたちもいつかはこうなりたいと思っている。

さて、タイトルとはいささか外れますが、ボジョレ・ヌーボーの季節です。ここでボジョレ・ヌーボーについてひとくさりしたいと思います。余談中の余談ですが、お許しください。

日本のスーパー、酒屋、デパート、レストランではヌーボーの大宣伝中です。ボジョレ・ヌーボー、エタリベ（ヌーボーたぐいま到着）とかいって大商戦を繰り広げています。最近ではボジョレだけでなく、コート・デュ・ローヌ・ヌーボーとかアンジュー・ヌーボーとか、ボジョレ（リヨンのすぐそば）にあやかって他の地方も生産を始めました。この時期、日本とアメリカ向けでエールフ

ランスの貨物便は満杯となります。日本が世界一の得意先、アメリカがこれにつづきます。

運賃や付加価値がついて1本3,000円くらいするのでしょうか。フランスでは20ユーロもするワインなど、ふつうのワインでもだれも飲みません。わたしも日本のニュースを聞いて、そういえば季節だなと初めて気づいたくらいです。ボジョレ・ヌーボーなどだれも飲まないし、存在価値すらありません。パリのようにおのぼりさんが多いところは、客が注文するのでおいてありますが、それ以外では探すのに苦労します。

フランス人に言わせると、こんなグレープ・ジュースの出来そこないを販売するとは言語道断、ということになります。新酒（ヌーボー）は、その地方で忙しい仕込みを終え、家族やら手伝ってくれた村人やらを招き、ことし仕込んだ樽を1樽開けて皆で祝うというものです。金を払って飲もうなんて人はだれもおりません。なぜこんな出来そこないがもてはやされるのか、フランス人にはまったく不可解な現象です。

安くておいしいワインが日本にたくさん輸出されています。ボジョレ・ヌーボーに血道をあげるのも結構ですが、いろいろ試されてお気に入りのワインを見つけてください■

新 CD・ビデオ紹介 (Tom Toriyama)

(1) Basingstoke Ball Live 1971 (HRM524) by McBain's Scottish Country Dance Band

The Deuks Dang Ow're My Daddie (8x40J), Set of Strathspeys (4x48S), Set of Reels (8x32R), Set of Reels (4x32R), Bonnie Lass of Bon Accord (1x64S), Bonnie Anne (1x96J), Bonnie Anne - encore (1x96J), Bratach Bana (8x32R), Bratach Bana - encore (4x32R), Dundee Strathspey (4x32S), Jack's Delight (8x32R), Jack's Delight - encore (4x32R), Letham Ladies (4x40S), J.B. Milne (8x32R), J.B. Milne - encore (4x32R)

(2) Peter Macfarlane & Lilian Linden (Invercauld 001 2003)

Reels (8x32), Jigs (8x32), Slow Air Strathspeys (3x32), 6/8 Marches, Strathspeys (4x32), Reels (3x48), Slow Air & Waltz, Reels (4x32), Jigs (8x32), Slow Air Strathspeys (4x32), Polka, Waltzes, Jigs (4x32), Reels (8x32), Slow Air

(3) Video for Book 43 Dances produced by Malcolm Brown

(1) は、ジミー・シャンドの引退後、1970年代の南イングランドで実力、人気ともナンバーワンだったマクベイン・バンドが、ベイジングストークで演奏したときのライブ・レコーディングである。フィドル1本と3台のアコーディオンでぐいぐい押しまくるといふ感じ、ドカドカのリズムとあいまって、これで踊ると楽しい。ダンサーと一体になったノリがあふれている。70年代に録音したテープをCD化したわりには音質の劣化は感じられず、元気のいい音が響いている。〔注文略号:マクベインCD〕

(2)はピーター・マクファーランのフィドル、リリアン・リンデンのピアノによる演奏で、タイトルからもお分かりのように特定のダンスのため

の演奏ではない。音楽はすべてこの二人の作曲によるもの。ただし、この音楽どこかで聞いたなあ、という印象が残る。押しつけがましくない演奏で、クラスでもあるいはリスニングにも適している。キース・スミスのカイリン・スタジオにおける鮮明な録音である。ステップ、フォーメーション、ダンス練習に使いみちが多い。〔注文略号:リリアン・リンデンCD〕

(3)はマルカム・ブラウン制作のビデオである。収録はビクトリー・メモリアル・ホール（このホール、日本人はビクトリアと誤解している。“勝利”のほうである）で行なわれ、ピアニストはイアン・マクフェイルがつとめたが、ビデオの音楽はCDのものを使っている。また、サマースクー

ル第3, 4週木曜日のヤンガーホールにおけるディスプレイも収録している。

ビデオに出演している12名のダンサーは、

Duncan Brown	ダンカン・ブラウン	ヨーク/在エキター
Hannah Littlejohn	ハナ・リトルジョン	南ウェールズ
Kate Sweeney	ケイト・スウィニー	ロンドン
Katrina Thomson	カトリナ・トムソン	リッチモンド (英)
Andrea Re	アンドレア・レー	イタリア/在ダンディー
Nicole Michon	ニコル・ミション	リヨン/フランス
Iain Farrell	イアン・ファレル	ロンドン
Pekka Arikoski	ペッカ・アリコスキ	フィンランド/在シェフィールド
Katharine Hoskyn	カザリン・ホスキン	ニュージーランド
Jonathan Lovell	ジョンサン・ロベル	サンノゼ (米)
Alice Smith	アリス・スミス	リーズ
Alan Highet	アラン・ハイト	ヨーク

と多彩で有能な若手ダンサーがそろっている。マルカム制作のビデオは出演ダンサーの当たり外れがあるけれども、今回は当たりのほうである。いずれにしろBook 43をどう踊っているか、一見の価値はある。【注文略号:Book 43 ビデオ】

マクベインCD	¥2,600
リリアン・リンデンCD	¥2,600
Book 43 ビデオ	¥4,000
(いずれも送料込み)	

以上のCD、ビデオのご注文は

郵便振替 00240-0-63517

東京ランチ

(この口座は物品購入専用です)

締切り 11月21日(金)

お渡し 12月下旬 担当 藤田淑子■

旧作CD、ダンスブックのあっせん

新しいCDばかりでなく、以前に発売された録音や資料がほしいというご希望があり、つぎの手順でご希望におこたえします。

(Step - 1) ご希望のダンス名と音楽か説明書かを同封の「旧作CD・ダンスブック 問合せ/注文書」に記入して、ランチショップ担当に送っていただく。締切り11月末日。

例:Midnight Oil 音楽

(Step - 2) ランチでCD、ダンスブックの入手可否、価格を回答して12月中旬までにご返却する。

(Step - 3) ランチ回答にもとづき、ご注文とご送金をいただく。締切り12月末日。

グループ行事案内

荒川スコティッシュ CDC

第2回パーティ

11月16日(日) 1-4.30

荒川区第九峽田(はけた)小・体育館
(地下鉄町屋駅3分) ¥600

連絡先 竹本光雄 Fax 03-3898-2484

川越スコティッシュフローラーズ

第11回ミニパーティー

11月19日(水) 1-4.30

クラッセ川越6F(川越駅5分) ¥1,000

連絡先 星野薫 049-235-1147

赤羽 S.C.D.C.

第14回 Autumn End Ball

11月23日(日) 11-4.00

赤羽会館4F(赤羽駅南口3分) ¥1,500

連絡先 真庭成子 03-3907-9357

横浜スコティッシュカントリーダンスクラブ

パーティー

11月29日(土) 12-4.00

港南公会堂(区総合庁舎5F)

(地下鉄港南中央駅2分) ¥1,000

連絡先 尾田久男 045-743-2594

(夜9時以降に)

東京スコットランドダンスを楽しむ会

2003 Year End Ball

- 40th Anniversary -

12月14日(日) 1-5.00

日本出版クラブ会館(飯田橋駅8分) ¥7,000

申込締切り 11月末日

連絡・申込先 福島チイ子 03-3330-2845

岐阜スコティッシュカントリーダンスクラブ

- Farewell 2003 -

12月21日(日) 11-5.00

岐阜グランドホテル ¥8,000

申込締切り 12月7日

連絡先 渡部秀樹 0587-55-2423

TSスコティッシュ・カントリー・ダンサーズ

Annual/New Year Dance 2004

1月12日(月・祝) 1-4.30

武蔵野市 SWING/北2F

(武蔵境駅北口1分) ¥1,000

連絡先 トム鳥山 044-988-7773

次号は1月発行予定。2月-4月のお知らせをう